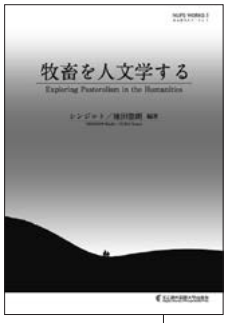
シンジルト・地田徹朗 編著『牧畜を人文学する』

名古屋外国語大学出版会、二〇二一年

城月 雅大



「もったいない」。本書に対する感想。

「都市に暮らす私たちが得たものは何か、失ったものはなにか　コロナ禍の世界で、移動・越境することの意味を考える」

これは本書のジャケットの折り返しに添えられた文言である。この文言通り、ユーラシア、アフリカ大陸などのさまざまな牧畜民の生きざまや、文化・社会のあり様を各地域研究の専門家たちによって分析・考察されたものがまとめられた貴重な一冊である。牧畜社会でどのようなリーダーが求められ、選ばれるのか、略奪行為の意味や遊牧民と土地との関係、農耕民族とは異なる集団的アイデンティティの獲得のあり方などが詳細に考察されており、グイグイと惹き付けられる内容で充満されている。

全部で十二章で構成される本書、しかも、多くの章でそれぞれ異なる牧畜民が考察対象となっており、とても私の力とこの短い紙幅では咀嚼しきれない。が故に、単純に興味深いと特に思えた二、三のエピソードをかいつまみながら考えてみたい。

ユーラシア牧畜民のリーダーは、民の信頼を得る上でみずからの権威を示す必要があり、それがゆえに現代にいたるまでシャーマニズムの世界観が生き続けているという。その世界観とは、「地下から天空にいたるまで垂直多層的な構造をしており、各層に神や霊がいるとされる」世界らしい。ある種、アニミズム的世界観に類する構造的認識は、必ずしも牧畜民にのみ見られるものではない。しかし、神や霊といった観念を抜きにしても、この世界の（垂直的）重層的知覚を、現代都市社会に住まう人びとのどれほどが感じ得ているだろうか。さまざまな混乱を見るにつけ、多くの人にとって、この世界は、まるで厚さわずか数ミリの厚紙で作られたジグソーパズルのように見えているのではないだろうかと思う。ピースに上手くハマらなければ終わり。そうでなければ、違和感のあるピースを無理やりはめ込んで、後々の不具合や、創造性の芽が摘まれることに目をつむるのみだ。

第三章では、ロシアの遊牧民の土地に関する観念について考察されている。人類の歴史からみれば、定住生活の歴史はほんのわずかだ。しかし、国民国家の形成、そして近代化は多くの人びとをして定住の民とさせた。ロシアの遊牧民は、遊牧的生活がゆえに土地を「所有する」という観念自体が希薄で、天から「借りた」ものと認識しているらしい。当然、農民との間で対立が起こる。こうした、農耕民と牧畜民との土地にまつわる観念の違いにまつわる考察は本章以外にも多く登場する。地域はどこであれ、牧畜民の基本の行動原理は家畜のための水場と牧草地の確保ための定期的な移動である。そこでは、フォーマル／インフォーマルな形で境界は越境される。時として、その越境は地理的・空間的に険しい道のりを伴う。長く続くコロナ禍にあって、私たちが直面している種々の問題に、遊牧民的メンタリティ、言い換えれば非環境決定論的生き方は、示唆的であると思う。

この他にも、エチオピアのボラナと呼ばれる遊牧民の多軸的な生計維持のあり方や、ブータン中西部に暮らすラガップと呼ばれる高地民の「ネップ（低地の農耕民との相互共益的関係性）の仕組みなど、興味深い事例が多く紹介されている。特に、ボラナの多様な生計の維持の仕方は、南部アフリカをフィールドとする人類学者である丸山淳子氏の言葉を借りれば「ひとつのことをするやつら」となってしまった現代人に、思考的越境をもたらしてくれる気がする。

最後に。本書がもたらしてくれるパースペクティブは実に多岐にわたる。確かに、本書の編著者、執筆者たちは人文学系の研究者なのかもしれない。そして、調査研究において採用された方法も多分に「人文学的」だと思う。でも、やめませんか？　人文学という領域に「定住」することを。それくらい、学問「越境的」な本書であるがゆえに、「もったいない」。

参考文献

松村圭一郎＋コクヨ野外学習センター編（二〇二一）『働くことの人類学』株式会社国島社